

徳島県スポーツ少年団に参加する子どもの屋外遊びと少年団活動の関係
-石井町スポーツ少年団員を事例にして-

松尾 哲哉¹ 佐藤 充宏²

The Outdoor Play and Sport Activities of Junior Sports Club Members:
From the Survey to JSC Members at Ishii-cho in Tokushima Prefecture

Tetsuya MATSUO, Mitsuhiro SATO

ABSTRACT

The purpose of this study is to reveal the relation between the outdoor play and sport activities of 67 members of Junior Sports Club (JSC) at Ishii-cho in Tokushima prefecture. We made the survey of the time budget, the attitude toward sports and the sport behavior of JSC members. First, we use a framework as the conception model of a child life space, which is composed of three axes: physical-mental activity space, free-controlled space from adults, private-formal space. Then, the important thing left to discuss is the relation between the outdoor play and sport activity spaces by these points.

This study leads to the following results: (1) The amount of outdoor playing time decreases as the sport time increases in JSC members. They played outdoors for about 3 hours except the sport time on Saturdays which are off and on Sundays. (2) The commonality in both spaces was physical activities, communication among friends how fun the play elements. The children were gladly to sport in an outdoor play, in which the children recomposed the play elements of sports. (3) The difference between two spaces was whether the children are controlled from adults or not. Because, in the JSC sport activities, the children were controlled by the instructor. (4) The children of the JSC produced the sport culture by the process (learning a sport → taking a sport to pieces → recomposing a sport). At one time they played outdoors and at another time they did sports in JSC, enjoying themselves.

KEYWORDS : Junior Sports Club (JSC), outdoor play, 5 days a week system at school

¹ 徳島健康科学研究所

² 徳島大学総合科学部スポーツ社会学研究室

Ⅰ. はじめに

現代の少子化現象や屋外遊びの場の喪失は子どもの生活世界を大きく変えてきた。子ども白書によれば、子どもの睡眠、遊び、手伝いの時間が減少してきた反面、テレビやTVゲームなどのレジャー活動の時間が増加していることが報告されている。その結果、子どもの昼夜の生活スタイルの区別はなくなり、時間意識は平板化し、時間がより個人的なものになったため、他者と共有する感覚が弱まっているといった問題が表面化した¹³⁾。そこで、子どもを持つ親たちは、従来、屋外遊びで得てきた人間関係や子どもの集団活動の体験を、社会団体や地域クラブに所属することで、その一部を代替的に体験させようとする傾向がみられるようになった。

このような子どもの急激な環境変化に対して、スポーツ少年団は1995年より地域社会において青少年により多くのスポーツ活動の機会と場を保障するための育成施策を展開している。これは2003年の学校週五日制の完全実施をにらんだもので、今後の地域スポーツ活動の大きな役割を果たすものと期待されている¹⁴⁾。スポーツ少年団は、1962年にスポーツを通じて子どもの健全育成を図る組織として日本体育協会に創設されて以来、「スポーツの場を通しての教育」「スポーツの生活化」を理念に掲げ、「少年の、少年による、少年のためのスポーツ」を目標に発展してきた¹⁵⁾。しかし、一部の少年団では、あまりにも大会での成績を意識するために、活動に参加できる子どもたちの範囲を限定してきた¹⁶⁾。また、大人が過剰に管理する少年団では、逆に子どもの自主性は奪われ、スポーツ技術は学ばなければならないものになり、習い事のひとつとして塾やスクールとして存在する傾向が強くなってきている。

しかし、そのような少年団活動でも現代の子どもの環境から考えれば、スポーツとふれあえる機会を提供してくれる重要な機関であり、そこでの技能の習得や仲間関係が子どもの発育発達に大きな影響を与えることは言うまでもない。学校週五日制の移行期で自由裁量時間が増大している現時点において、今後の子どもの地域スポーツの展開を検討し、彼らの日常生活におけるスポーツ活動と、自由空間としての屋外の遊びとの関係を理解しておくことは重要な研究課題であると考えられる。

そこで本研究の主題は、子どもの遊び空間（特に屋外遊び）の減少という問題とスポーツ少年団の専門化という2つの社会現象の中で、どのように子どもが自分の生活世界を創造・再構成しているのかということに注目したい。子どもの生活世界という観点から、少年団活動を再度検討し直し、少年団活動のスポーツ行動における屋外遊びとの共通性と相違性を考察するのが本研究の目的である。

Ⅱ. 概念モデル

子どもの生活世界の視点から、屋外遊びとスポーツ少年団活動を独自の文化領域としてとらえ概念モデルを設定したい。

住田(1983)¹⁷⁾によれば、子どもを取りまく社会環境の変化を知るためには、子どもの生活行動に着目する必要があるとする。そこで、子どもの生活行動を「空間」「対人関係」の2つの視点でとらえている。まず、「空間」の視点とは、空間が子どもの意図に合致する時、それ自体に実体的な意味を持つという考えに立脚するものである。子どもの意図に合致する空間とは、「遊び空間」や「スポーツ空間」など子ども自身が自由に選択できる空間（自由選択的結合）と、「学校」や「家庭」など子どもが限定的に選択されたり、拘束される空間（限定的拘束的結合）があげられる。次に、「対人関係」の視点とは、子どもの生活行動場面に見られるフォーマル-インフォーマルの人間関係である。この「フォーマル」な人間関係とは、組織内で制定された規則によって意識的に明示された組織目標、地位、役割などをもった人間関係のことをいう。

また、矢野(1995)¹⁸⁾によれば、子どもの文化とは、子どもに特有な生活様式であり、子どもが生きる活動をする際に社会的に選択する一連の行動様式であると規定している。従って、子どもの

文化を研究するには、文化を行動の次元で限定してとらえる必要があるとする。

また、矢野は、子どもは身体・精神ともに未熟な存在であると同時に相対的意味で成熟した諸能力を駆使し、一個の独立した主体として活動できる存在と定義づけている。子どもの生活も大人同様に複数の領域-空間に分化・分断されるとする。子どもが生き活動する日常生活の領域-空間は「主体的活動-教育的活動」「身体活動-精神活動」の軸により、原理的に4つに分けられるとしている。

本研究の観点は、子どもが主体的に活動を行う自由裁量時間における選択行動に着目している。従って、住田の示した子ども自身が自由に選択できる空間-拘束される空間の軸を、それと同質の次元として自主的-教育的活動の軸を採用した。

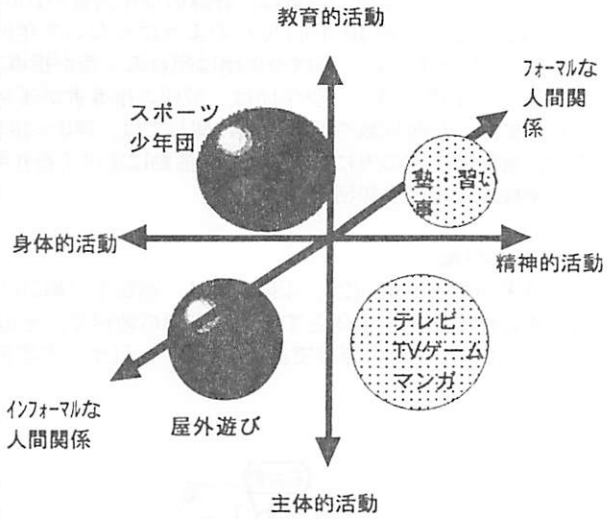


図1 概念モデル

そこで本研究では、身体的活動-精神的活動、主体的活動-教育的活動、フォーマルな人間関係-インフォーマルな人間関係の3軸を採用し、3次元の子どもの生活世界の概念モデルを設定し図1に示した。この概念モデルにおいて、屋外遊びは身体的活動、自主的活動、インフォーマルな人間関係の領域に位置すると仮定した。また、スポーツ少年団活動は、身体的活動、教育的活動、インフォーマルな人間関係の領域に位置づくると仮定した。

III. 方法

1. 調査対象

徳島県名西郡石井町の3つスポーツ少年団に参加している子ども67名（男子37名、女子30名）である。その内訳は、石井クラブ野球スポーツ少年団（以下、野球少年団と称す）員が17名、石井ボンバーズミニバスケットスポーツ少年団（以下、バスケット少年団と称す）員が32名、石井ラビッツバレーボールスポーツ少年団（以下、バレー少年団と称す）員が18名である。

表1 調査対象とした少年団の特性

	野球少年団	バスケット少年団	バレー少年団
指導者	監督1 (1年交代)	監督1 (固定)	監督1コーチ3 (固定)
参加学校数	1校	4校	5校
団員 男子	17人	20人	0人
女子	0人	12人	18人
活動時間	火曜日 16:00~17:30 木曜日 16:00~17:30 土曜日 14:00~17:00 休みの土曜日9:00~13:00 日曜日 9:00~13:00	水曜日 17:00~19:30 木曜日 17:00~19:30 金曜日 17:00~19:30 土曜日 14:00~17:00 休みの土曜日9:00~12:00 日曜日 9:00~12:00	火曜日 17:00~19:30 木曜日 17:00~19:30 土曜日 14:00~17:00 休みの土曜日9:00~12:00 日曜日 9:00~12:00
徳島県内の成績	県ベスト16	常にベスト4以内	常にベスト8以内

徳島県スポーツ少年団の特徴は、野球の少年団数が166 (26.3%) と多く、バスケットの13 (2.9%) , バレーボールの40 (9.1%) のように少ない少年団とはかなり環境が違う関係にある¹⁵⁾。また、表1に示したように、野球少年団は団員の父親が指導者として1年交代で運営を行っているが、バスケ少年団とバレー少年団は、常任の指導者が運営するスポーツ教室的な色彩が強い少年団である。また、活動回数や活動時間に関しては、週3~4回で1回当たり90分~240分の活動で、徳島県内では量的に上位の方に位置する⁹⁾。活動はすべて石井町内の小学校の体育館、グランド開放を利用する学校施設型の少年団である。

2. 調査地の特徴

徳島県名西郡石井町 (25, 436人) は、徳島市 (約26.9万人) の西方に位置し、吉野川右岸下流に広がる自然堤防帯を主体とするほぼ方形の地形で、その面積は、28.83平方キロであり、東西約6キロ、南方に約5キロの方形である (図2)。近年、宅地化が進み、旧来の近郊農業地が減少している⁹⁾。

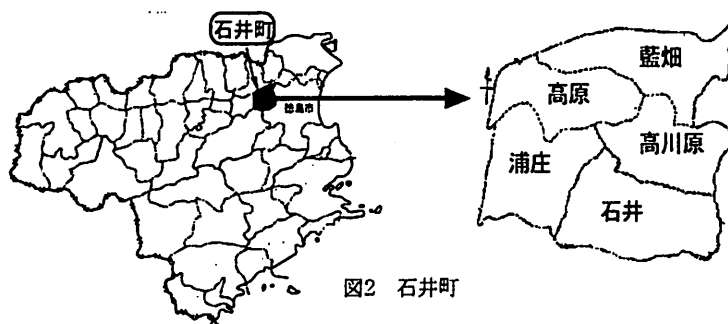


図2 石井町

子どもの人口動態をみるために、昭和60年、平成元年、平成7年の5~9歳、10~14歳の男女の子どもの数を比較してみたものが図3である。昭和60年の時点で5~9歳男子884人、女子863人、10~14歳男子933人、女子995人である。この数を100として、以下、平成元年、平成7年の子どもの数を百分率にして折れ線グラフに表した。

その結果、石井町の場合、過去10年間で子どもの人口は昭和60年の4分の3程度まで減少していることが分かる。特に、平成に入ってから減少率が高く、低年齢になればなるほど減少率は加速している状況が窺える。この状況から、近い将来、少年団に参加する子どもも減少すると思われる。

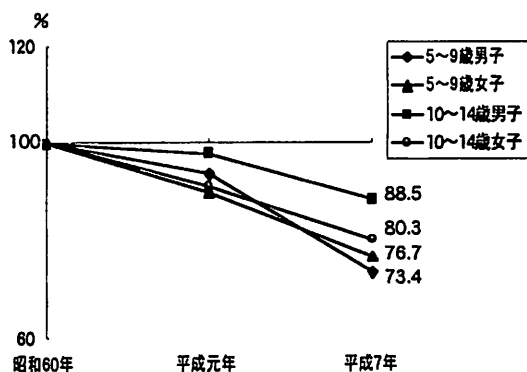


図3 石井町の5~14歳人口の減少 (昭和60年人口を100とした場合)

3. 研究方法

本研究では、子どもの生活世界における屋外遊びと少年団活動の関係を、スポーツ少年団活動が屋外遊びとの関わり合いの中でどのように影響し合っているかを分析するために、1996年9月6週間にわたり少年団活動を観察しながら以下の3つの調査を行った。

調査1は、スポーツ少年団員の平日の学校を終えてから就寝までの時間の過ごし方や、休日の過ごし方とスポーツ少年団活動の関係を明らかにするために、生活時間調査と面接調査を行った。特に

屋外遊びに対する意識、場所、仲間関係、内容などについて面接調査で明らかにした。調査2は、スポーツ少年団活動に対する態度、意識について質問紙調査を実施した。調査データをもとに意味構造分析を行い、子どもの側からの少年団活動の意味づけを再確認する。調査3は、日常の少年団活動をビデオ撮影し、特定の子どもの行動を観察調査法で追跡記録し、少年団活動の空間の細分化しそれぞれの意味内容を解釈した。これら3つの調査から、子どもの生活空間の概念モデルを分析枠組みにして、スポーツ少年団活動が屋外遊びとどのように関わり影響を及ぼしているのかを総合的に論議する。

IV. 結果及び考察

1. 調査1

(1) 自由裁量時間における屋外遊びの特徴

図4に一週間の少年団員の自由裁量時間（少年団活動を除く）の実態を示した。自由裁量時間の活動の中で大きな比重を占めているのはテレビの視聴時間であった。スポーツ少年団活動や塾・習い事によって自由裁量時間が減少している傾向が示されたにもかかわらず、実質的に減少しているのはこのテレビ視聴時間ではなく屋外遊びの時間であることが分かった。屋外遊びの特徴は1週間の平均時間でみると男子が86分で、女子が54分と男子の方が32分も長い。これは藤田（1991）の調査と同様の傾向が得られた⁹⁾。平日の場合、放課後2時間程度の自由な時間があれば男子は外で遊んでいると考えられる。少年団活動がある平日とない平日とを比較すると、その差は野球少年団で70分、バスケット少年団で28分、バレー少年団で約10分と活動のない平日の方が長くなっている。所属する少年団で大きな開きがあるのは、男子より女子の方が少年団がなければ塾に通っているためであると考えられる。また、休みの土曜日と日曜日の場合、どの団員も屋外遊びが3時間を超えて確保されている。

つまり、子どもは少年団の活動時間を確保することで、自由裁量時間の屋外遊び活動に対して物理的な圧迫を与えられ減少してきていると考えるのが妥当であろう。特にその傾向は塾通いをする女子団員に強く表れていることが分かった。一部の団員には自由裁量時間の確保のため就寝時間が11時を越える子もいて、生活時間における自由裁量時間の確保の難しさを浮き彫りにしている。

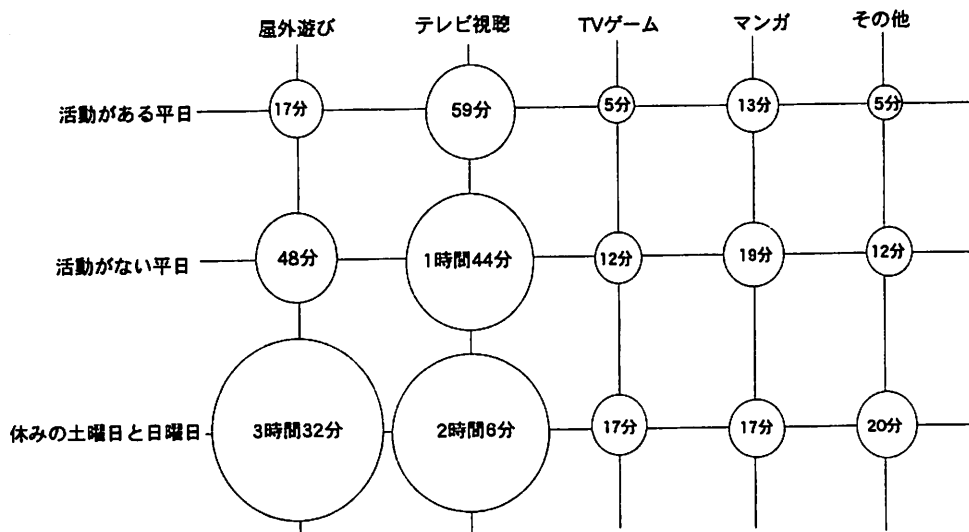


図4 子どもの自由裁量時間の実態

表2では、「屋外遊びと屋内遊びのどちらを好むか」という質問に対しての解答傾向を、性別と所属別で比較した。性別では男子(81.1%)>女子(70.0%), 所属別では、野球(88.2%)>バレー(72.2%)>バスケット(71.9%)という順で屋外遊びを好む傾向が窺えた。屋外遊びを好む理由に関しては、全体では「面白い遊びがある」が47.1%と高い割合を示し、その傾向は性別では女子(57.1%), 所属ではバレー少年団(69.2%)に強く表れた。また、「身体を動かすことが好き」(25.5%), 「広くて自由だ」(19.5%)などの理由もあがった。性差による違いとして、男子の方が屋外遊びに対して好意を持つ傾向が強いと考えることができる。男子の方が屋外遊びの運動量や自由さに興味を持ち、逆に女子の方は遊びの内容の方に興味を持っている傾向があると思われる。いずれにせよ、屋外遊びは子どもにとって面白い遊びであり、広くて自由な雰囲気味わえ、大勢で十分体を動かすことができる空間であると認識していることが分かる。

表4は実際に行っている屋外遊びの内容を上位3つをあげて比較したものである。野球少年団員は野球、キャッチボール、壁あて、バスケット少年団員はバスケット、バレー少年団員はバレーとそれぞれの種目のスポーツを遊びとして取り入れている結果が窺える。少年団活動で身につけた技能や人間関係は屋外遊びの資源として大きな影響を与えている。表5は、現在の屋外遊びに対する満足度を調査した結果である。「もっと遊びたい」という欲求はどの団員にも強く表れ、特に少年団活動や塾通いで忙しい女子にその傾向が強い。

表2 屋外遊びと屋内遊びを好む割合の比較

	全体 (n=67)	男子(n=37)	女子(n=30)	野球(n=17)	バスケット(n=32)	バレー (n=18)
屋外遊びが好き	76.1	81.1	70	88.2	71.9	72.2
屋内遊びが好き	13.4	8.1	20	1.2	15.6	16.7
どちらも好き	10.5	10.8	10	1.2	12.5	11.1

表3 屋外遊びを好む理由の割合の比較

	全体 (n=51)	男子(n=30)	女子(n=21)	野球(n=15)	バスケット(n=23)	バレー (n=13)
面白い遊びがある	47.1	40	57.1	26.7	47.8	69.2
体を動かすことが好き	25.5	33.3	14.3	46.7	13	23.1
広くて自由だ	19.6	23.3	14.3	26.7	17.4	15.4
あばれるのが好き	9.8	6.7	14.3	0	21.7	0
遊びやすい	5.9	3.3	9.5	0	4.3	0
大勢で遊べる	5.9	6.7	4.8	6.7	8.7	15.4
体が鍛えられる	2	3.3	0	6.7	0	0
友達がいる	2	0	4.8	0	4.3	0

表4 屋外遊びの内容

	野球(n=17)	バスケット男子(n=20)	バスケット女子(n=12)	バレー (n=18)
1 位	野球(41.2)	I7-ガン(45.0)	バスケット(66.7)	バレーボール(77.8)
2 位	キャッチボール(41.2)	バスケット(30.0)	固定遊具(33.3)	ボール遊び(22.2)
3 位	壁あて(41.2)	鬼ごっこ(15.0)	鬼ごっこ(25.0)	鬼ごっこ(16.7)

表5 屋外遊びに対する満足度

	全体 (n=67)	男子(n=37)	女子(n=30)	野球(n=17)	バスケット(n=32)	バレー (n=18)
満足している	27.9	32.4	22.6	23.5	34.4	16.7
もっと遊びたい	72	67.6	77.4	76.5	65.6	83.3

表6に、実際にスポーツ少年団に入って困ったことの内容を示した。「ない」と応えた子どもが26.9%いた。これに対して「遊びの時間が減った」を答えた子どもは55.2%いた。また、「練習がきつい」(26.9%)、「勉強がおくれる」(14.9%)といった不安を示す子どももいた。しかし、スポーツ少年団活動が子どもたちの屋外遊びを圧迫しているのだろうか。表7のように、「自由時間があればやってみたくこと」の質問に、「スポーツ少年団」を1位にあげた子どもが43.3%もいた。全体的な発現率ではテレビ・ビデオ(80.6%)に後れるものの、スポーツ少年団は74.7%、屋外遊びは74.5%と高い割合を示した。そして表8のように、「希望する屋外遊び」では、少年活動と同じ種目のスポーツで遊びたいと答えている。つまり、遊びの時間は減ってしまったが、新たに競技スポーツという文化資本を手に入れて、屋外遊びもしたいのだが、少年団でスポーツする方がより興味があることが窺える。

表6 スポーツ少年団に入って困ったこと

	1 位	2 位	3 位	4 位	合 計
遊ぶ時間が減った	50.7	3.7	1.5	0	55.2
練習がきつい	6	17.9	3.7	0	26.9
勉強がおくれる	4.5	9	1.5	0	14.9
試合に出れない	4.5	1.5	3.7	0	9
楽しくない	0	1.5	0	1.5	3
上手にならない	1.5	0	0	0	1.5
困ったことはない	26.9	-	-	-	26.9

表7 自由時間があればしてみたい活動

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	合 計
スポーツ少年団	43.3	17.9	4.5	6	3	74.7
他のスポーツ少年団	0	3	1.5	1.5	1.5	7.5
屋外遊び	16.4	22.4	10.4	11.9	13.4	74.5
テレビ・ビデオ	6	16.4	29.9	16.4	11.9	80.6
TVゲーム	22.4	10.4	17.9	9	6	65.7
屋内遊び	0	3	1.5	1.5	6	12
マンガ	7.5	16.4	14.9	16.4	4.3	59.5
音楽	4.5	4.5	10.4	11.9	11.9	43.2
塾	0	3	4.5	1.5	3	12
習い事	0	3	1.5	6	1.5	12

表8 希望する屋外遊び

	野球(n=17)	バスケット男子(n=20)	バスケット女子(n=12)	バレー (n=18)
1 位	野球(58.8)	バスケット(35.0)	バスケット(41.7)	バレーボール(44.4)
2 位	釣り(11.8)	I7-ガン(10.0)	ボール遊び(16.7)	ボール遊び(22.2)
3 位	I7-ガン(11.8)	サッカー(10.0)	鬼ごっこ(16.7)	鬼ごっこ(11.8)

2. 調査2

子どもの屋外遊びに影響を及ぼす少年団活動の要因を検討するためには、少年団活動の機能的特性の側面から意味構造を明らかにすることが重要である。そこでスポーツ少年団活動に対する意識を、活動動機、活動評価、活動志向の三側面から測定し、その意味構造を分析した。

質問項目は、スポーツ活動に対する意識を機能的特性の側面から、動機項目、評価項目、態度項

目の変数を24項目設定した。スポーツを行うことで機能的な影響が起こる領域として、心理的領域、身体的領域、社会的領域があげられるが、これらの領域に配慮しながら作成した。また、とても思う(4点)から全く思わない(1点)までの4件法を採用し、性差、種目差、役割差によるクロス分析と、因子分析を利用したSS分析¹⁹⁾を行った。

(1) 性差、種目差、役割差の比較によるスポーツ活動に関する意識の特徴

全体的な回答傾向を明らかにするために、全体、性差、種目による平均値を比較した。測定値の2.5ポイントを基準値と考えれば、22項目が正の反応を示し、「試合に勝ちたい」(Mean±SD: 3.97±.25), 「スポーツが上手になりたい」(3.94±.24), 「スポーツで仲間が増えた」(3.83±.42), 「スポーツをして体を動かすことは楽しい」(3.81±.43)の順で高得点を示した。すなわち、活動レベルでは試合で勝つこと、技能向上が活動動機を中心であり、仲間が増えたという活動評価や、身体活動は楽しいという体験が、その動機を強化していると考えられる。

性差による意識差は、F検定の結果、すべての項目で有意な差は見られなかった。しかし、大きな平均値の差があった項目として、「けがをしてもスポーツを続けたい」の項目で女子の方が男子に比べて+0.51ポイント高い意識を持っていた。また、「試合での勝ち負けは関係ない」の項目で、女子が2.27と基準値より低い値であったが男子では2.62と基準値以上で、女子より+0.35ポイント高い値となった。それ以外の項目では平均値間にほとんど差がなく、性差はスポーツ少年団活動の意識差や態度差には大きな影響を及ぼしていないと考えられる。

種目別に平均値を算出し、F検定を行った。その結果、「有名なスポーツ選手になりたい」の項目では野球3.76>バレー3.67>バスケット3.00の順で意識が強かった(F=6.38, p<.01)。これは、日本では野球やバレーボールはプロスポーツとしてメディアスポーツの花形であり、日常生活の中で身近な情報として入手できるからである。このような種目による社会的背景の差が意識差に現れたと考えるのが妥当であろう。「汚いプレーをしてまで試合に勝ちたくはない」という項目では、野球3.24>バスケット3.21>バレー2.06の順で有意な差があった(F=7.53, p<.01)。野球やバスケットでは試合に勝つことよりもフェアなプレーを重視しているが、バレーの場合は何としても試合には勝つことに注意が向けられているという意識の違いがみられた。これは種目の特性のために指導内容の差異が反映していると考えられる。また、「スポーツをした後は気持ちがいい」という項目では、バレー3.67>野球3.53>バスケット3.14の順で意識の強さに差が見られた(F=3.91, p<.05)。このように、種目による子どもの意識差は、将来へのあこがれ、スポーツモラル、運動充実感に表れていて、指導者の指導方針やスポーツ観が重要なモデルとなっていることが分かった。

役割差では、レギュラー、交代要員、その他のグループ間で平均点を比較し、F検定を行った。

「スポーツをして親を喜ばせたい」という意識が、交代要員4.00>レギュラー3.89>その他3.67の順で高い平均値を示した(F=3.84, p<.05)。親は子どもにとって重要な他者であり、スポーツ少年団活動で認めてもらう(喜ばせる)行為は、自分が上手になり試合で活躍することである。試合はスポーツ少年団活動において重要な自己実現の機会であり、その成果を親に認められることは子どもの社会化がより促進されると考えられる。

(2) スポーツ少年団活動に対する意識の因子分析

全体的な傾向は明らかになったが、それぞれの表出した意識の関連を詳しく検討するために、意味構造分析(semantic structure analysis: SS分析と略す)を行った¹⁹⁾。しかし、「試合で勝ちたい」の項目はゼロ分散であるため因子分析ができないので、他の項目を因子分析したのち、第1因子上に配置した。また、基準値に平均値が満たなかった「スポーツはお金がかかる」と「試合での勝ち負けは関係ない」の2項目は、負の意識反応であったため削除して因子分析を行った。

結果は表9に示すとおりである。第5因子までで全分散の57.3%が説明可能であった。各項目の信頼性を明らかにするために、Cronbachの α 係数を採用して検討した。その結果、第1因子および第2因子については、高い信頼性が見られたが、第3因子、第4因子、第5因子については、0.4~0.5程度の低い信頼性とどまった。なお、項目の後ろの(動)は動機項目として、(評)は評価項

目として、(態)は態度項目として、当初それぞれを設定していたことを示している。以下因子の解釈を行った結果、第1因子を「活動に対する動機の因子(以下、活動の動機と称す)」、第2因子を「自己向上への動機因子(以下、自己向上と称す)」、第3因子「技術を獲得する楽しさの因子(以下、技術獲得と称す)」、第4因子を「社会活動への参加の因子(以下、社会活動参加と略す)」、第5因子を「活動をに対する不適応要因(以下、活動不適応と略す)」と命名した。

表9 スポーツ少年団活動に対する意識・態度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4	F5	α
Q6 試合で活躍したい(動)	.81329	-.00562	.00356	-.04703	-.08710	.7597
Q19 中学になっても今のスポーツは続けたい(動)	.75627	.01856	.12452	-.06739	-.02241	
Q22 スポーツをした後は気持ちがよい(評)	.72774	.30722	.24459	.06814	-.13526	
Q23 スポーツをして体が丈夫になった(評)	.52451	.19551	.04233	.21114	.10533	
Q16 団内の約束は守らなければならない(態)	.45404	.43672	-.21286	.10746	-.11826	
Q21 有名なスポーツ選手になりたい(動)	.44441	.31336	.27704	.05094	.05476	
Q8 けがをしてもスポーツを続けたい(態)	.42885	.19932	.14563	.29908	-.26748	
Q1 スポーツで体を鍛えたい(動)	.04816	.79549	.09237	-.08394	.23004	.7583
Q4 スポーツをして肌を喜ばせたい(動)	.12079	.79347	-.14107	.00526	-.00482	
Q5 スポーツで思いきり体を動かしたい(動)	.15588	.63903	.54618	-.09916	.11074	
Q17 スポーツでは友達には負けたくない(動)	.37065	.50237	-.02620	-.01824	-.17426	
Q24 スポーツで思いきり体を動かしている(評)	.37587	.49699	.26255	.28308	-.18087	
Q7 スポーツが上手になりたい(動)	.12838	-.09872	.77521	.07650	-.00301	.4500
Q11 スポーツをして体を動かすことは楽しい(評)	.09429	.47706	.56172	.24130	-.13377	
Q18 練習を休んではいけない(態)	.30245	-.11999	-.14858	.75430	.19897	.5219
Q9 汚いプレイをしてまで試合に勝ちたくない	-.26699	.03677	.25143	.72524	-.16764	
Q3 スポーツで仲間が増えた(評)	.11499	-.12604	.43558	.46508	.29120	
Q10 スポーツは学校の勉強に役立つ(評)	.32119	.25035	.39158	.43347	.04139	
Q13 スポーツをして自由時間がなくなった(評)	-.15492	-.07185	.08146	.13726	.74742	.4600
Q14 スポーツをした後はとても疲れる(評)	-.05435	.22994	-.19453	.06313	.65411	
Q15 練習よりは試合がしたい(動)	.06322	-.08142	.31482	-.30225	.51473	
寄与率	24.7	10.2	9.1	6.9	6.3	
累積寄与率	24.7	34.9	44.0	50.9	57.3	

次に、これらの因子分析の結果と各項目間の相関係数を検討して、SSグラフを作成したのが図5である。縦軸は平均評価値を、横軸に因子分析で抽出された5因子を示し、各項目を構造的に配列した。そして各項目間の相関分析を行い、SSグラフ上で、上に位置している項目に対して、正の相関関係($r=0.4$ 以上)にあるものに、矢印を記入した。「試合に勝つ」の項目はすべての子どもに強い反応が見られたので、便宜上、第1因子の上位に設定した。

SSグラフを解釈しながら、子どものスポーツ少年団活動に対する意味構造を明らかにしたい。

まず、第1因子に位置する「試合で活躍したい」の項目は、子どもの具体的な活動目標であり、自己向上の動機の項目群と相関関係にあると考えられる。これは、団内の競争関係や指導者・親の期待が子どもの外発的動機づけに強い影響を与えていることを示している。少年団の代表として試合で活躍することが、その子どもの存在を社会的に承認し、スポーツ活動により多くの社会的付加価値を築き上げていることが分かる。そのため、活動の中心的目標でもある「試合に勝ちたい」という欲求は、当然この「試合で活躍したい」の上位に位置し、強い相関関係にあると考えるのが妥当であろう。

一方、活動の主体である身体の爽快感や充実感といった体験は、第2因子の「スポーツが上手になりたい」という技術獲得の欲求項目に影響を与えている。これは「できる楽しさを味わいたい」

というスポーツ活動の内発的動機づけの中心を構成するもので、スポーツ少年団活動の重要な意味構造の要因となっていることが分かる。また、この技術獲得は、スポーツ少年団団員として社会参加することで保障される。少年団としての集団活動の内容を学習し仲間と共有することも少年団活動の重要な機能として認めていることが窺える。そして、スポーツが上手になることは、より高い次元のスポーツの楽しみを味わわせてくれる空間を提供してくれるのである。その結果、やはり「試合に勝ちたい」という現実的な活動の欲求に強く影響していくのではないかと考察できる。

すなわち、現実的な「試合で活躍したい」という活動の動機は、「スポーツが上手になりたい」という理想の自己像へのあこがれと共鳴し、実際の活動目標でもある「試合に勝ちたい」という欲求を通じて意味づけられていると解釈することが妥当である。この考えを強化させているのは、指導者や保護者の団員に対する期待である。この外発的動機づけが少年団活動をより仕事化させている原因であるし、屋外遊びとの本質的な違いを明確にしているところでもある。

第5因子の活動不満は、活動不適応で特に身体的な満足感が十分得られていないか、あるいは身体能力以上の活動のために引き起こされる問題を含んでいると思われる。子どもの不適応は様々な形で現れるが、それらの問題を克服して継続していくひとつの方向として、第2因子の「スポーツで体を鍛えたい」という欲求への転換が示された。少年団活動の不適応に対しては、自己の身体的能力への反省を促す結果となってしまっているのである。

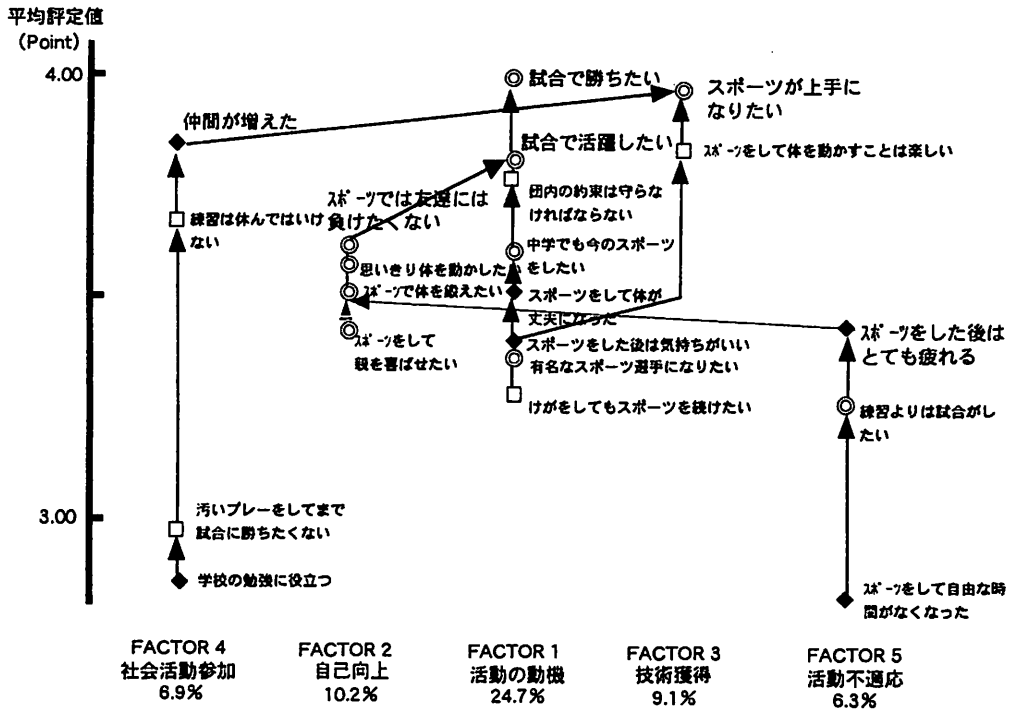


図5 スポーツ少年団活動のSSグラフ

2. 調査3

スポーツ少年団活動における屋外遊びとの共通性、つまり遊び性を検討するために実際のスポーツ少年団活動をビデオ収録により記録し、子どもの生活世界としての地域スポーツ活動を「集合→練習前→練習中→練習後→解散」の一連の文脈のなかで読みとる。子どもの活動のなかでの言動を分析し、その行動の意味を明らかにしたい。

(1) 野球少年団 11月5日(木) 石井小学校運動場

15:59	A,B,C,D,E,F,G,H,Iは準備運動を行い,A-B,C-D,E-F,G-Hで2組の柔軟体操をする	
16:01	A,C,E,B,D,F,G,H,Iの順でグラウンドを3周走る J,Kが来て,グラウンドに挨拶をする 準備運動をした後でグラウンドを走る	
16:05	A,B,C,D,E,Fは各自でストレッチをする 遅れてG,H,Iがストレッチに参加する	
16:06	J,Kもストレッチをする	
16:07	Lが来て,グラウンドに挨拶をする 準備運動をした後グラウンドを走る	
16:08	A,C,E,B,F,D,G,Hの順で整列し,A-C,E-B,D-E,G-Hの組でキャッチボールをする	
16:10	J-Kもキャッチボールをする	
16:12	L-Iもキャッチボールをする	
16:18	M,Nが来て,グラウンドに挨拶をする 準備運動をした後でグラウンドを走る 指導者2が来る Oが来て,グラウンドに挨拶をする 準備運動をした後でグラウンドを走る	
16:19	M-Nはキャッチボールをする 指導者1は近くでアドバイスをする	
16:24	全員が指導者1,2の周りに集まり,指導者2がキャッチボールの指導をする…①	
16:25	P,Qが来て,グラウンドに挨拶をする 準備運動をした後でグラウンドを走る	
16:26	バッティング(バント3本,トス5本,フリー3本)の準備 指導者1がボールケースを運ぶ 各々が思い思いに散らばる (グラウンド西側) (グラウンド東側)	
16:26	バッターA,ピッチャーC,O待つ	バッターJ,ピッチャーL,K待つ
16:27	バッターO,ピッチャーA,E待つ	バッターK,ピッチャーJ,L待つ
16:30	バッターE,ピッチャーA,B待つ	バッターL,ピッチャーJ,C待つ
	Eは指導者2にバッティングの指導を受ける Rが来て,グラウンドに挨拶をする 準備運動をした後でグラウンドを走る	

子どもたちはグラウンドに来たらず挨拶をする。これは団の約束ごとであり子どもたちはきちんと大声で一礼していた。そして、自主的にグラウンドを走り準備運動を行う。しかし、ここでの子どもの動きには習慣化された活動で感じが見られた。次に、子どもたちはキャッチボールを行う。子どもたちの中には真剣にキャッチボールに取り組む者もいれば、準備運動同様、儀礼的に行う者もいた。

<ケース1>

16:24 全員が指導者1, 2の周りに集まり, キャッチボールに関して指導者2が指導をする

- 指導者2 「きちんとキャッチボールできよんは半分しかおらん。」
 「投げるんもきちんとよう投げんし, 受けるんもきちんと両手でとらん。」
 「ゆっくりでええんよ, ちゃんとボールをほうらな。」
 「半分以下しかボール投げよらんし, 受けよらん。」
 「上手になる子はちゃんとボールをほおひよぞ。」
 「下の子も一緒。はや一のうてもいい。ボールは後でビューってほれるようになるけんな。」
 「ボールを正確に相手の胸にほうる練習。」
 「ボールを両手でとる練習をせんだら, 上達せんけんな。」

この「正確さ」を要求する指導は子どもたち全員を対象としたものであった。子どもたちは真剣に指導者2を見つめていた。すべてがそうではないが実際の子どもの活動は、コントロールよりも速くボールを投げることに注意が注がれていたのか、相手の前でバウンドしたり、あらぬ方向に飛んでいったりするのが見られ、その影響もあって受ける方もうまく処理できずにボールを追いかけていくことがあった。子どもたちはそれぞれがキャッチボールを一生懸命にやっているという感じは受ける。しかし、ほとんどの子どもは、気持ちの中では「上手になりたい」と思っているものの、活動の部分では速く投げたり、格好良く捕ったりすることに楽しみを感じているようだった。このように「正確さが要求される活動」の中でも子どもたちは友達とボールの速さを競ったりする「ズレの部分」を楽しんでいるといえる。指導が終わった後、子どもたちはバント3本、トス5本、フリー3本のバッティングを行う。それぞれがバッター、ピッチャー、守備、球拾いと役割をこな

す。次に、子どもたちはノックを受けたため、所定の守備位置につく。このノックで要求されるのは「個人のボールを取る技術の向上」と「その守備位置として動き」であった。

<ケース2> ノック練習におけるG君の行動

F君のプレー（捕球）を見る → 自分でゴロをとるまねをする → B君のプレーを見る → 「オーイ」と声をかけ構える
 → プレー成功 → 指導者「グローブ出るのが遅い」 → 「はい」と返事 → E君のプレーを見る →
 グローブをたたきながらE君に声をかけ笑う → プレー成功

G君は自分のプレーをする（自分の番）前にF君のプレーを見ている。そしてF君のプレーを自分の場合とダブらせて捕球するまねを行っている。これはG君が自らを選んだ行動であった。自分の活動へのレディネスを高めたのである。そして自分のプレー後、成功したにもかかわらず指導者2からG君は注意めいたことを言われている。返事はしたのだが、すぐE君のプレーを見た後で同じ守備位置のE君とグローブをたたきながらおしゃべりを始めた。今までスポーツ活動と言えば丸で囲んだ行動に注目してきた。しかし実際には、「自分がプレーする時間」と「友達のプレーを見てる時間」と「移動の時間」を渡り歩いていたのである。友達のプレーを見ることは、子どもたち同士での「上手下手を評価する判断」になり、スポーツ少年団の中での自分の位置を認識するひとつの手段になっていると考えられる。友達のプレーに「ナイスプレー」と声かけたり、グローブをはずしたり、友達と話したりと子どもの自分の番を待つスタイルは様々ではあるが、友達のプレーを見ることで仕方を学び、自分のプレーに活かそうとしている。

(2) バスケット少年団 11月1日（金） 高川原体育館

16:55	A,B,C,D,aは思い思いにシュートなどしている E,F,G,H,b,c,d,e,fはステージの上でアンケートを受ける
17:01	E,F,G,H,b,c,d,e,fは思い思いにシュートなどをする I,J,gが来る 着替えのためにステージへ行く
17:02	指導者1は来ている全員を集める
17:03	指示の後、思い思いにシュートなどをする I,J,gはステージの上でアンケートを受ける
17:04	指導者1の合図の下、コートを2列で走る (走る⇒スキップ⇒手を前後交互しながらスキップ⇒手を上横前しながらスキップ)
17:06	コートいっぱい円形に広がってストレッチをする
17:07	Iは円の外を走る
17:08	J,gは円の外を走: Iは円の外でストレッチをする
17:09	J,gは円の外でストレッチをする
17:12	1列6人で全員フットワークをする ・後ろ向きのステップ ・後ろ向き腰を振りながらのステップ ・サイドステップ（左）（右） ・サイドステップからのダッシュ（左）（右） ・サイドキック ・10回ジャンプからダッシュ ・指先を床に着きながら前に進む ・フォーライン
17:20	K,L,h,i,h,i,j,k,l,m,nが来る 着替えのためにステージに行く 2人組でのコースチェックをする
17:24	K,L,j,k,l,m,nはステージの上でアンケートを受ける h,iはコートの外を走る
17:25	h,iはコートの外でストレッチをする
17:28	2人組のボールタッチ（1人がボールを所持する人の後ろに立ち左右交互にタッチする） Aは右手を骨折しているため左手でドリブルの練習をする…①
17:30	h,iがボールタッチをする
17:32	ハーフコートの四角パス（右まわり）をする M,N,O,P,Q,oが来る 着替えのためにステージに行く

17:07	Iは円の外を走る	
17:08	J,gは円の外を走:	Iは円の外でストレッチをする
17:09	J,gは円の外でストレッチをする	
17:12	1列6人で全員フットワークをする	
	・後ろ向きのステップ	・後ろ向き腰を振りながらのステップ
	・サイドステップ(左)(右)	・サイドステップからのダッシュ(左)(右)
	・サイドキック	・10回ジャンプからダッシュ
	・指先を床に着きながら前に進む	・フォーライン
17:20	K,L,h,i,h,i,j,k,l,m,nが来る 着替えのためにステージに行く	
	2人組でのコースチェックをする	
17:24	K,L,j,k,l,m,nはステージの上でアンケートを受ける	
	h,iはコートの外を走る	

子どもたちは思い思いにシュートを楽しむ。指導者1の指示で練習が始まる。子どもたちは2列になってコート周りをかけ声をかけながら走り出した。その後、コートいっぱいに広がって、全員でストレッチを行うが、その際に、遅れてきた子どもはコートの外など別の場所で同じメニューを行う。6人1列でフットワークを行う。ここでの子どもの顔は真剣であり、きついか嫌がっているという感じは受けられない。また動きも機敏であり、習慣化された儀礼的な動きにはほど遠い。しかし、自分の番が終わった時に顔がほころぶ場面も見られた。これはそこに友達よりも速かったなどズレの部分での楽しさがあるからだと考えられる。次に2人組でのボールタッチを行う。このボールタッチとは1人が座った状態でボールを前で所持し、もう1人がその後ろに立ち左右交互からボールにタッチするものである。時間は10秒程度である。この際、子どもたちは2組を作り、ボールを取りに行き、指導者1の指示を待つわけだがその間の移動や動作は実に機敏である。ボールタッチは1人2回行うが、なかには疲れている子どもも何人かいた。

右手を骨折しているA君はボールタッチができないために体育館の隅で左手でのドリブルの練習を行っていた。A君にとってこれはどういう意味があるのだろうか。子どもたちは全員「バスケットボール」をするために来ている。A君にとってもそれは例外ではないが、けがで練習には参加できないため、宿題などはせずにドリブルを行っている。A君はとるべき行動を理解している。しかし、見学でもよかったわけだが、友達に刺激されたかどうかは分からないがドリブルを行っている。これは「上手になりたい」、「早くバスケットをしたい」という思いの現れと考えられる。

今度は、ハーフコートの四角パス(右左両回り)と連続タップ(50回)を四角パスは学年で、連続タップは男女別で二手に分かれて行う。四角パスの右回りが終わった後で指導者1は全員に四角パスについての指導をする。子どもたちは指導者1の方を見て聞いている。この後、2人組でのオールコート2線速攻、3人組でのハーフコート3線速攻からオールコート2対1、オールコート3対3を行う。これらの練習はこれまでより実践的な練習であるため、自分のプレー時間は増える。しかし、それ以上に友達のプレーを見る時間が増える。これらの練習は指導者にとっての「個人的な指導」の場であると同時に、それが子どもたちにとっても友達を通じての「学習の場」となっている。

<ケース3>

18:19 指導者1はプレーについて指導する。

aさん(ディフェンス)はマークしていたbさん(オフェンス)にスクリーンアウトをかけることができず、bさんにゴール下に入られてボールを取られる。

指導者1 「もう一回。」

aさん自身自分の失敗に気づいている。

指導者1 「ブロック(スクリーンアウト)してないで。止めなんだから、おまえ背こまいんだろ。」

「背こまいんなら、大きいやつを止めれるだろ。なんぼでも、止めようと思つたら。」

指導者1は制限区域内(ゴール下)を指さしながら、aさんに対して

「大きいやつをここ(ゴール下)に、はめなんだからええだろ。」

その際、aさんと一緒にプレーしていたb,c,d,e,fさんも指導者1の方を見て聞いている。

指導者1 「ここにはめなんだからええで、どんな大きいやつでも、分かる。ここにはめなんだから勝ちだろが。」

指導者1はプレーについて指導する。B君(オフェンス)は前に走っている味方に向かって大きなパスをする。指導者1はプレーを中断させる。

指導者1 「こうだろ。来てみーだ。」

指導者1はB君をマークしていたC君（ディフェンス）をB君に近づけて、C君に対して
 指導者1 「こうしたら大きいパスはようしてこんだ。こうやって空けるけん大きいパスしてくるぞ。」
 指導者1は前を指さして、
 指導者1 「パスされたら4対2, 4対3で負けるだろうが、ここで大きいパスをささんようにしたらいいぞ。」
 指導者1はC君の近くでディフェンスをしていたD君に対しても、
 指導者1 「2人はいかんでいい。1人でいいけん。まず、大きいパスはささんように止めたらいい。」

オールコート3対3やオールコート5対5での場面に見られた指導者1の個人指導とそこでの子どもの反応を示した。指導者1は子どものプレーに対して指導する場合はプレーを中断させて全員に聞こえるぐらいの声で指導している。活動中での子どものプレーに指導する場合はこのようなケースが数多く見られる。この少年団活動は、野球スポーツ少年団の場合と同様に、「自分がプレーする時間」と「友達のプレーを見る時間」と「移動の時間」からなり、その空間の中で子どもたちは過ごしている。しかし、ここでは野球スポーツ少年団以上に「友達のプレーを見る」ことが重要になる。aさんも、C君もみんなの前で指導を受けている。aさんにしても、C君にしてもプレーを中断されてすぐ間違いに気づかされることは技術・戦術の学習には効果的であるといえるが、同時にみんなの前で指導されることは恥ずかしいことである。そして、まわり子どもたちは「自分でなくてよかった」と思う反面、冷静にそのプレーについて考えることができる。そこで、自分に重なり合わせて「スポーツの技術・戦術やルールの学習」をしていると考えられる。またそこには緊張感が生まれ、その緊張感がこの「学習」をより一層効果的にしていると考えられる。

(3) バレー少年団 11月7日(木) 高川原町立体育館

16:50	A,B,C,D,E,F,G,H,I,J,K,L,M,Nはネット張りをする O,P,Q,Rはネット張りのそばで話をする S,T,Uはボール遊びをする		
17:00	Vが来る 替替えのためにステージへ行く		
17:02	A,B,C,D,E,F,Gはネットの西側のコートでストレッチをする H,I,J,K,L,M,N,O,P,Q,R,S,T,U,Vはネットの東側のコートでストレッチをする		
17:05	指導者1が来る 全員が集合して指導者1に挨拶する 全員ストレッチのつづきをする		
17:07	指導者2が来る 全員が集合して指導者2に挨拶する 全員ストレッチのつづきをする		
17:10	A~Gは指導者1の所に集合し,指示を受ける H~Uは2,3組でパスをする ・ワンハンドパス(右)(左) ・頭上を通しての両手パス Aは指導者2に左手に包帯を巻いてもらう		
17:11	B~Gは2組でパスをする ・ワンハンドパス(右)(左) ・頭上を通しての両手パス		
17:14	グループ別のメニューをする…① ・グループ1…B,C,D,E,F,G ・グループ2…H,I,J,K ・グループ3…L,M,N ・グループ4…O,P,Q,R ・グループ5…S,T,U,V		
	グループ1	グループ2,3	グループ4,5
	2人組のオーバーハンドパス	2人組のアンダーハンドパス	2人組のアンダーハンドパス
	2人組のアンダーハンドパス	1人の連続オーバーハンドパス	1人のオーバーハンドパス型
	2人組のアタック&レシーブ	2人組のオーバーハンドパス	1人のアンダーハンドパス型
17:25	グループ1はレシーブをする 指導者1はボールを打つ Aは壁でボール打ちをする		
17:30	指導者2はグループ2にプレーの指導する		
17:32	指導者2はグループ3にプレーの指導する グループ1はレシーブのためフラフープを使用する 指導者1が指導する…②		
17:35	グループ2は2人組のアタック&レシーブをする グループ3はオーバー,アンダーハンドパスをする		
17:37	指導者2はグループ3にプレーの指導する グループ4,5は各々のグループでボールを落とさないようにパスをまわす		

	・ワンハンドパス (右) (左)	・頭上を通しての両手パス
17:11	Aは指導者2に左手に包帯を巻いてもらう B～Gは2組でパスをする	
17:14	・ワンハンドパス (右) (左)	・頭上を通しての両手パス
	グループ別のメニューをする…①	
	・グループ1…B,C,D,E,F,G	・グループ2…H,I,J,K
	・グループ3…L,M,N	・グループ4…O,P,Q,R

子どもたちは活動のための準備を6, 5年生が中心となって自主的にはじめる。準備が終わると、6年生と5, 4, 3, 2年生に分かれてストレッチをはじめる。指導者1が来ると子どもたちは集合して挨拶をする。その後、ストレッチの続きと2組のパスの練習を行い、17:24 グループ別のメニューをする。…①

グループは学年を基準に分けられ、6年生を頂点に以下それぞれの学年にある程度要求される技術獲得のための練習を行う。また指導者もそれぞれのグループに指導するというように合理化されたものである。ここでの活動は学年があがるにつれ要求される技術は高度で、5, 6年生の子どもたちの顔には真剣さが見られ、技術を何とかものにしようという感じがある。学年が下の2, 3年生の子どもたちは技術的なものはほとんど要求されず見よう見まねの活動が主体である。子どもたちは4人組で円形になりボールを落とさないようにパスを必死でつなぐ、いわば遊戯(プレイ)に近い活動を行っているものの、そこには子どもたち内での教え合いがあり、向上しようとする意志が見える。このグループ別の練習はスペースを余すことなく利用し、活動内容にはかなりの工夫がされている。また時間もかなり多く割かれていて、ここでの活動は子どもたちにとっても大きな意味を持つと考えられる。そのうち、2つの場面に見られたグループ別の活動の意味づけを考える。17:32 グループ1はレシーブのためにフラフープを使用する。…②

これは子どもたちが体でレシーブの形を覚えることを意図したものと考えられる。ここには子どもたちにとって、レシーブ技術の獲得という大きな目標以外にも、ボールを使わないレシーブの練習という驚きと発見とともに、新しいスポーツ文化の創造があると考えられる。18:20 グループ4, 5は1列に並び指導者3が投げるボールをレシーブする。

ここではレシーブ技術の獲得は二の次で、まずは子どもに「レシーブができる」という楽しさを教えようとする指導者の意図が感じられる。子どもたちは指導者にほめられるとほんとうれしそうな顔をする。レシーブ技術を獲得しようというよりは、その活動(レシーブ)そのものやほめられることを楽しんでいった感じがある。「できる」、「ほめられる」が子どもたちの練習の支えになっていると考えられる。

またこの日の活動には見られなかったが、グループ別の練習では6年生と5年生、6年生と4年生とこのようなグループ作りを行い、指導者はあまり口出ししないで上級生が下級生に教えるというように子どもが主体的に活動を行うこともある。このような活動に工夫を加えることは子どもの発育発達面で有効に機能すると考えられる。

(4) 少年団活動にみる時空間の細分化と主体的活動

調査2の結果からも分かるように、「試合に勝ちたい」という気持ちが子どものスポーツ少年団活動の中心をなし、子どもたちもそのための活動を行っている。しかしこのように、勝つために学ばなくてはならない技術練習のなかにも、「指導されている空間」とは別に「子ども自身で主体的に活動できる空間」が存在する。この「子ども自身で主体的に活動できる空間」は「主体的にプレーしている空間」、「他者のプレーをみている空間」、「移動の空間」の3つに分けられる。このそれぞれの空間に子どもたちにとっての「面白さ」が存在していると考えられる。その「面白さ」とは指導者が求めている「正確さを要求している部分」と子どもたち同士の中に生まれる「ズレの部分」が見い出される。まず、正確さを要求される部分での面白さとは、技術獲得・向上など子どもたちがスポーツ活動によって得ることがができる達成感、高い緊張感、激しい競争を克服して得たより高い次元の面白さといえることができる。また、ズレの部分での面白さとは、どちらが速くボールを投げられるかやどちらが速く終わるかといったスポーツ少年団活動の中での子どもたち独自の世界内での競争など遊びによる面白さといえることができる。管理された活動の中でも大人の注意がな

界内での競争など遊びによる面白さということが出来る。管理された活動の中でも大人の注意がなければ遊び化する場面が存在していることが確認された。子どもたちのスポーツ少年団活動の根底にはこの二つのベクトルの「面白さ」があり、またこの楽しさがあるがゆえに、子どものスポーツ少年団活動の継続があると考えられる。

V. 論 議

1. 時間配分からみた屋外遊びと少年団活動の関係

子どもの生活時間配分の実態では、自由裁量時間の活動の中で大きな比重を占めているのはテレビの視聴時間であった。平日に限っていえば、自由裁量時間は1日平均で2時間23分、そのうちテレビ視聴は1時間27分(61.0%)を占めた。そして、少年団活動や塾・習い事によって自由裁量時間が減少している傾向が示されたにもかかわらず、実質的に減少しているのはテレビ視聴時間ではなく屋外遊びの時間であることも分かった。少年団活動による生活時間への物理的な圧迫は、自由裁量時間の屋外遊び活動の減少化傾向を促していた。そのため、自由時間を得るために就寝時間を遅らせる例や、今まで通っていた塾や習い事を辞めて少年団活動に集中する例がみられた。自由裁量時間は細切れになり、短時間でも精神を解放して楽しめるテレビ・マンガ・ゲームに頼るしかない子どもたちの生活世界を垣間みた。生活時間の配分という観点からは、子どもの自主的活動である屋外遊びの時間は、教育的活動としての少年団活動や塾、習い事などの時間によって細分化され、平日では少年団がない日の1時間程度、休日では3時間程度の屋外遊びをしている。

2. 屋外遊びと少年団活動の共通性と相違性

屋外遊びと少年団活動における共通する関係を、身体活動、子ども集団活動、活動内容について比較検討する。身体活動レベルでは、どちらも身体運動を伴った活動で、走る、飛ぶ、投げるなどを思いきり使うという意味で同じ価値を共有している。SSグラフでも示されたように屋外遊びの時間はとれなくても少年団活動で体を動かす楽しみを味わっていることが分かる。子どもの少年団活動に対して身体能力や体力の向上の期待は高く、それが少年団活動の評価につながっていると考えられる。子ども集団活動レベルでは、屋外遊びの仲間と少年団の仲間が重なり合う傾向がある。自然発生的な屋外遊びの仲間集団は、同じ居住地区や同じ学校のクラスメイトによって形成される。少年団に加入する場合も同じ学校の友達や兄弟の影響が強く、少年団活動と屋外遊びでより親密な仲間関係を形成していると思われる。また、バスケットやバレーの少年団のように、他の小学校の友達をつくる機会にもなっていて、それが少年団の評価につながる場合もある。活動内容のレベルでは、所属する少年団のスポーツが、屋外遊びで利用される傾向が強いことが分かった。スポーツのもつ独自のルールや技術や面白さを理解し身につけることによって、屋外遊びでは「スポーツごっこ」が登場している。子どもたちはスポーツの要素を巧みにその場の状態に応じて改良し、楽しむ術を持っていた。例えば、野球ごっこなら、ゴムボールと竹の棒を持ち寄りそれぞれの配役をきめ、お気に入りのスター選手取りで共演するのである。これは、屋外遊びの陳腐化として理解するのではなく、子どもの現時点での生活環境や遊び材料、仲間の状態を最適化させた結果とみるのが妥当であろう。また、少年団活動でも、勝つために学ばなくてはならない技術練習が、指導されている空間、主体的にプレーしている空間、他者のプレーを見ている空間と、子ども自身が本来求められていないズレの活動を楽しむ空間も存在し、管理された活動の中でも大人の注意がなければ遊び化する場面もあることが明らかとなった。

次に、屋外遊びと少年団活動の違いを、主体的活動、未確定性の活動、生産性の活動について比較検討してみる。主体的活動レベルでは、少年団活動が教育的活動、あるいは限定的拘束的活動であるかという議論に焦点が当てられよう。自由な時間があればしたい活動は何かという問いに対して、スポーツ少年団を回答した子どもは82.1%、そのうち一番したい活動としてあげた子どもは43.3%にも及ぶ。概念モデルでは両者の違いを主体的-教育的活動、フォーマル-インフォーマルな人間関係の違いとして仮定した。スポーツ少年団活動は大人の手によって管理運営されているが、

子どもにとっては面白い活動であり、自主的な選択を通して納得したうえで活動に参加している。しかし、活動の運営そのものは指導者によって管理されていて、この意味で子どもにとっては限定的拘束的活動であり、活動における社会的役割も決まっているのでフォーマルな人間関係が成立していると考えられる。未確定性の活動のレベルについては、屋外遊びについては未確定性が保たれているが、少年団活動の場合は指導者あるいは保護者が「子どものため」という前提のもとで大人が決定して子どもの未確定性を取り上げてしまう傾向がある。確かに、子どものためになっているかという判断をすべて子どもに委ねることはできない。少年団活動を安定した質の高い活動にするためにも指導者や保護者の介入は必要であろう。しかし「少年の、少年による、少年のためのスポーツ」という少年団の理念に代表されるように、子どもにとって主体的に取り組める活動の場の工夫は、将来の地域スポーツの中核を狙う少年団活動には必須の課題であろう。生産性の活動レベルでは、屋外遊びが非生産的な活動であるのに対して、スポーツ少年団活動が生産的な活動であるということである。カイヨフ (R.Caillois) は遊びの本質的な活動の特徴のひとつとして非生産性の活動を強調し、遊びの本質はあくまで面白さであって、いかなる種類の新要素もつくり出さないと論じている²⁾。一見無価値と思える性質から遊びやスポーツの面白さがわき出てくるはずであるが、現在、指導者や保護者がスポーツ少年団活動において教育的価値を生み出そうとしている。健康、体力、仲間関係、精神的成長、基本的な社会的行動等、それが過剰な大人の管理や期待となって子どもたちの自主性を奪い、大人の価値観がすべての活動を支配してしまえば、スポーツ活動は子どもにとって「与えられた仕事」になる危険性を持っている。

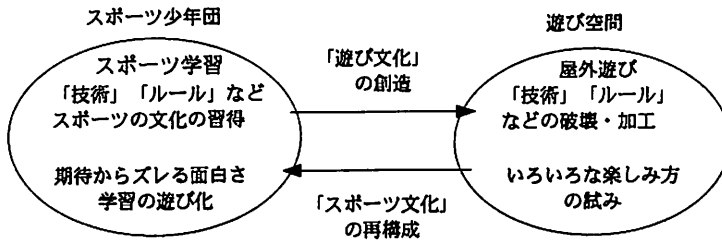


図6 子どもの生活世界のスポーツという文化の学習・破壊・再構成

図6に、屋外遊びと少年団活動の関係におけるスポーツの文化の学習・破壊・再構成というプロセスを示した。一見、対立しあう文化領域としてとらえられがちであった両者は、子どものスポーツの文化を熟成させる上で相互に補完し合っている関係にあることが示唆された。「身体活動」、「子ども集団活動」、「スポーツの文化要素」という領域で高い共通性が認められ、「主体的活動」、「未確定性の活動」、「非生産性の活動」での相違性の部分では、子どものスポーツの文化的熟練過程として補完関係にあり、それぞれの存在意義が認められた。

3. 学校週五日制における今後のスポーツ少年団の課題

子ども白書 (1995) では、「学校週五日制が導入され、子どもの屋外遊びは減少し、屋内で過ごす時間が増加している。また、ダイナミックな活動が減り、無個人的な活動になっている」ことが報告された¹³⁾。本研究結果では、休日の土曜日と学校のある土曜日では、屋外遊びをする時間量に大きな差が生まれた。学校週五日制が導入されればスポーツ少年団に参加している子どもは屋外遊びを好んで行動していることが分かった (表7)。

表7 土曜日が休みの場合と休んでない場合の比較

	テレビ視聴時間	遊びの時間	マンガの時間	TVゲームの時間	塾・習い事の時間
休みの土曜日	1時間55分	3時間34分	21分	15分	15分
学校がある土曜日	1時間38分	22分	18分	18分	12分
活動時間差	17分	3時間12分	3分	-3分	3分

しかし、同時に、土曜日の午前中にスポーツ少年団活動を当てたり、終日対外試合が組み込まれるといった少年団活動の変化もみられるようになってきている。本研究の調査対象とした少年団は、全国的にみても活動回数が多い。日本スポーツ少年団では週3日で1回2時間以内の活動を目安に指導しているが思うような変化は見られない。その結果、子どもの中にはスポーツ少年団活動により「屋外遊びの時間が減少した」とか「練習がきつい」というように生活に圧迫を感じている者もいることが明らかになった。今までの体制を崩したくないという指導者の気持ちは理解できる。あるいは子どものために重要な運動や交流の機会を提供していることも分かる。ならば、より活動内容に「あそび」の要素の部分、自主的活動、未確定性活動、非生産的活動を取り入れる工夫が必要となろう。

今後、地域スポーツの中核組織として展開を図る日本スポーツ少年団に、子どもの生活を考えた上での活動指針づくり、あるいは仕組みづくりを期待する。ますます減少する屋外遊びが、スポーツを通じて再構成される可能性は本研究結果から可能性が見いだせたと考える。しかし、スポーツ活動への過剰な適応も問題である。今後、スポーツ少年団に携わる大人たちの側から、子どもの生活世界の一領域として適切なスポーツ活動の量と内容が検討されて、他の活動とのバランス、子どもの自由空間の確保のことも含めて位置づける必要があると思われる。

VI. ま と め

子どもの自由裁量時間における屋外遊びとスポーツ少年団活動の関係をとらえ、それに付随する諸問題を考察してきた。しかし、本研究では徳島県石井町という地域を限定して調査を行った。これをそのまま全国で展開するスポーツ少年団に当てはめることはできない。この地域における特殊性を考慮に入れたうえで、子どもの生活空間の中で少年団活動は屋外遊びに多大な影響を及ぼすことを明らかにした。

まず、生活時間の中での自由時間は、スポーツ少年団活動や塾・習い事によって減少している傾向が示された。その中でも特に、実質的に減少しているのは屋外遊びの時間であることが分かった。つまり生活時間の上では少年団活動も屋外遊びに対しては競合し対立する文化であると考えることができる。

しかし、子どもたちは大人によって管理された少年団活動を面白い活動としてとらえている。最終的には自発的な選択を通して納得したうえで活動に参加していることが分かった。子どもは、スポーツ少年団活動と屋外遊びの関係の中で、「身体活動」、「子どもの集団の活動」、「スポーツの遊びの要素」という共通の価値を見いだしていた。反対に、両文化の相違性として、少年団活動は教育的活動=限定的拘束的空間としてとらえ、フォーマルな人間関係を通じて社会を学ぶ場であるとして位置づけている。屋外遊びは自主的活動=自由に選択できる空間として、その場で楽しめる人間関係で活動している。つまり、子ども自身それぞれに面白さを見だし、お互いの文化領域はスポーツの文化を醸造する上では相互補完の関係を持ち、スポーツの学習→解体→再構成という過程の中で自らのスポーツスタイルを形成しているのではないかと思われる。

参考文献

- 1) 育木邦男 1996 スポーツ少年団への団員の過度適応と学校への適応との関係 体育学研究 40-5 pp.291-303
- 2) R.カイヨワ 1990 多田道太郎・塚崎幹夫訳「遊びと人間」 講談社学術文庫 PP.82
- 3) 団琢磨 1994 週休二日制・学校週五日制時代の到来 団琢磨・大橋英勝編「学校五日制と生涯スポーツ」 不味堂出版 pp19-24
- 4) 藤崎真知代 1991 幼稚園と学校と生活 無藤隆編「新・児童心理学講座11-子どもの遊びと生活」 金子書房 pp.61-112
- 5) 藤田雅文 1995 徳島県下スポーツ少年団の活動実態と指導者の意識に関する研究 鳴門教育大学実技教育研究 第5巻 pp.1-7
- 6) 藤田紀昭 1991 少年団活動が子どもの遊びに与える影響に関する研究 日本体育学会第42回大会大会号 p162

徳島県スポーツ少年団に参加する子どもの屋外遊びと少年団活動の関係

- 7) J.ホイジンガ 1989 里見元一郎訳「ホイジンガ選集 ホモ・ルーデンス」 河出書房新社 P.90
- 8) 樋口康彦 1996 スポーツ集団における組織要因とメンバーの達成動機との関連について 実験社会心理学研究 36-1 pp.42-55
- 9) 石井町史編集会 1991 「石井町史」 pp.144-145
- 10) G.H.ミード著 1973 稲葉三千男, 滝沢正樹, 中野収訳「現代社会学大系 第10巻 精神・自我・社会」 青木書房 pp.146-239
- 11) 森岡清美, 塩原勉, 本間康平 1993「新社会学辞典」 有斐閣
- 12) 日本子どもを守る会編 1994 子ども白書1994年版 草土文化社 pp190-264
- 13) 日本子どもを守る会編 1995 子ども白書1995年版 草土文化社 pp194-195
- 14) 日本体育協会日本スポーツ少年団編 1997 平成8年度スポーツ少年団育成事業報告書
- 15) 日本体育協会日本スポーツ少年団編 1995「スポーツ少年団認定員のためのテキスト」
- 16) 大橋美勝 1972 現代スポーツの概念試論 岡山大学教育学部研究集録 75
- 17) 総務庁統計局 1996「平成7年国勢調査報告 第2巻 その2 36徳島県」, 財団法人日本統計協会, pp.14-15
- 18) 住田正樹 1983 子どもの生活構造と地域社会 松原・久富編著 「学習社会の成立と教育の再編」 東京大学出版会, pp57-118
- 19) 竹谷誠 1987 評定尺度データの意味構造分析法 行動計量学 14-2 pp10-17
- 20) 寺元潔 1990 子ども世界の原風景 黎明書房 PP136-143
- 21) チクセントミハイ 1991 今村浩明訳「楽しむということ」 思索社 pp27-28
- 22) 東海子ども文化研究所 1991 「子どもの発達とニューメディア」
- 23) 調枝孝治 1988 遊び・スポーツの教育学 体育科教育 1 pp14-17
- 24) 矢野弘 1995 用語解説「子どもの文化」 学校体育 11
- 25) 山本清洋 1987 子どもスポーツに関する社会化の現状と課題 体育・スポーツ社会学研究 6 pp27-49

(1997年9月19日受付, 1997年9月30日受理)

